

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第10号

2008年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

03-5228-3171

発行責任者: 吉谷かおる

イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。(ルカによる福音書第7章 50 節)

大岡左代子 (京都教区)

この夏、私は南インドの農村地帯に住むダリッドの女性たちと出会う研修ツアーに参加した。「ダリッド」とは「被抑圧民」という意味。インドのカースト制度の中に入らない元アウトカースト、元不可触民のことを指す。「不可触」(アンタッチャブル)とは、「見られてはならない」「近づいてはならない」「触れてはならない」という3つのことを意味してきた。不可触民の制度が1951年に廃止された今も、「触れてはならない」は厳然として残っており、ダリッドの人々は村の中に住むことさえゆるされていない地域がたくさんある。

8年前、エキキュメニカルな団体、「キリスト教女性センター」の活動の一環として、南インドの農村のダリッドの女性のエンパワメントと自立のための運動体「WOLD」(Women's Organization Liberation and Development)を支援す

るグループ「ニームの会」がつくられた。以来、2年に一度実施されている現地の女性たちとの交流・連帯の研修ツアーだった。

「WOLD」は、ダリッド女性の組織で中心メンバーは全員クリスチャンである。しかし「ダリッド女性は宗教を問わず、すべて同じシスターである」として活動している。長い歴史の中で「触れてはならない」と差別され、抑圧されてきた人たちが自立していくために必要なことは「人としての尊厳」をとりもどすこと、つまり自分で自分を疎外していることからの解放だ。これまで村をでることを許されず、家庭にしか居場所のなかった女性たちを集めて自助グループをつくり「私」の話をする訓練をする。それをお互いに聴きあう。読み書きの訓練をし、人に騙されないようにする。そうして、一人ひとりの尊厳が守られる中で、自分

の意見を言い、互いに協力する訓練をする…。このプロセスの中で「私たちは差別されるに値する人間ではないのだ。」というプライドをとりもどすのだ。

「WORLD」代表のプレマ・シャンタ・クマリは出自がダリッドであるがゆえに抑圧され、差別されてきた。プレマ自身その状況があたりまえだと長い間思ってきたが、差別から解放されるためには、教育を受けることが大切だという両親の考えのもと、プレマは大学で経済学や教育学を学ぶ。(彼女の共同体では初めての卒業のキャリアをもつ女性となった。)その学びの中で、彼女は「私たちダリッドも同じ人間であり、決して差別されていい存在ではない。」ということに気付いたという。そして、そのことをもっと多くの人が気づき、人間としての尊厳を取り戻していきたい…。そんな思いで「WORLD」の運動の基礎がつくられていった。

ダリッドの女性たちは、サリーの下にブラウスを着ることを許されてこなかったが、運動によってブラウスを着ることを勝ち取った。ジーンズやTシャツしか着ない私たち日本人にプレマは「日本人は服を持っていないのか？」と問う。私たちがきれいな服を着ているとみんな「ライルクー(きれい)！」ととても喜んでくれる。ダリッドの女性たちが綺麗なサリーを着て、おしゃれをすることは人としての尊厳を守り、自分を表現できる大切な手段であることを知った。20年

近く地道に続けてきた「WORLD」の活動は、多くのダリッドの女性たちを励まし力づけてきた。しかし政府からの支援打ち切りによって今、とても厳しい状況にある。抑圧されてきた人たちが力をもつことを政治は好まないのだ。それでもプレマは確信を持って言う。「人生は短い。毎日何かを怖れて何もしないのは毎日死んでいるのと同じだ。私は、どんな状況にあっても毎日生きる。神様は必ず見てくださっている」と。

聖書に「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と語るイエスの言葉が記されている。私は長い間、人々はこの言葉によって癒された、と思っていた。しかし、この言葉は、実は「行きなさい」という前に、すでにその人の中に現れたその人のもつ力をイエスが信じた結果ではないかと思う時、まさにこれは「エンパワメント」(=本来その人の持っている力をとりもどす)であったと思う。その力とは、どんな絶望の中にあっても生きるのだ、生きていていいのだ、と自分の生を肯定する力だ。抑圧され、無力感の中で生きてきたダリッドの女性たちが「わたしは、差別されていい存在ではない。生きてに値する人間なのだ」と気付いた時、はかりしれない解放感と喜びと力がわいてきたに違いない。そんな彼女たちの姿と、聖書の中でイエスに「安心して行きなさい」と言われた名前もない女性たちが重なって見えてくる。まさに自分で自分を疎外していることから

の解放であり、エンパワメントなのだ。

自分がボロボロになりながらも、今日もプレマは、南インドの地で、多くの抑圧された女性たちが「自分をかけがえの

ない大切な存在だ」と知り、「誇り高く生きられること」を願って活動している。そこに必ず神様の力が働くことを信じ、これからも祈りつづけたい。

## 「塵も積もれば…の重みにくじけず！」

毎号、「書評欄」を一番の楽しみにしています。で、時に「女性教役者の力づけ」になるような直接材料も取り上げていただければ、とか注文出してすみません。

さて、最近小さな体験を二つしました。一つは、私の出身教会所属のある女性信徒さんが「吉岡先生、少し成長されたみたい、このごろ 女性・女性 とあまり言わなくなったようだから」という意味の言葉を漏らされた、と人づてに聞きました。苦笑とはこのことでしょうネ。残念ながらその方の期待に反して、当の本人は全く「成長」していないと自認しているのですが。そして彼女は仕事を長年続けてきてその上で「女性の役割」も遺漏なくお上手、という方。もう一つは、かなりのご年配の女性が何かの話の折りに何気なく言われた言葉。「私はね、子どもの時の学芸会で、おばあさん役を振られた時に、嫌です、と言ったの。昔話には意地悪ばあさんが結構いて（舌切り雀が代表？なんでおばあさんが意地悪役に廻るの」といつも想っていたから」と。彼女はその年代からも推測できるように、

## 司祭 吉岡容子 (九州教区)

いわゆる「日本の女性」として期待されるまさにその期待値そのもののような女性で料理裁縫・ボランティア・人助け、年を超えてなんでもされるのです。この方は「フェミニズム」とか「ジェンダー」とかそんな言葉すら想ったことも使ったこともないでしょうけれど。


前者のような女性は実はたくさんおられますね。自分の能力で何不自由なく、今さら「女性云々だなんて」と。その方自身のためにはそれは喜ばしいことで、この社会の中で 女性としての 痛みも感じずに生涯を送れることはまさに 祝福そのものでありましょう。(神さまいかがですか?)ただこの体験をするたびに無念なのは「ああ、この方は、長年申いてきたし今も申っている女性たちとは連帯できないのだな、想いは通じないのだな」であります。神さまア、女性が俯かずに被害感など全くなく「雄々しく」生きていけるということは祝福の筈ですのに…。

九州教区でもやっと「ハラスメント」防止のための委員会が発足する準備とな

り、それはそれで全く緊急に必要なことですが、そんな大仰な大事件ではなくて、些細な「塵のような」ことの積み重ね、この空間に莫大な塵が実は舞っているに同じく、日常的に「無意識のなせる塵の差別感」に囲まれているというこの事実は一休どうしたら良いのでしょうか。過日、パキスタンとアフガニスタンでしたか、二回続いて女性の「自爆攻撃」がありました。新聞の見出しやら解説は「父兄や夫を殺された復讐心からだ」と。まるで復讐は女性の専売特許であるかのような口調で。自爆の手法など賛成するはずありませんがしかし、そこまで追い込まれながらかつ「マスコミ」によって「女性の復讐心」だと書かれて死んで行った、名も知らされない女性たち。男性のそれは復讐心と無縁のもの、或いは男性の復讐心はあって当たり前？この話題は「日常的」話題ではないでしょうが、

私たちの日常には口にした途端、言挙げした途端「そんなこと！」と一笑に付される類の「気色悪さ」がたくさんありません？つまり、些細な「心理的負荷」が「塵も積もれば山となる」。ある学者が「常識とは、敢えて常識だとさえ想わない、言わないことが本当の常識だ」と書いていました。これに最も該当するのが「女性教役者への受容性の期待値」ではないでしょうか。誰も「女性牧師だから男性より受容性に富んでいるべきだ」などと教役者も信徒がたも思っていないし、言葉にも勿論。でも事實は…。

日常に負う心理的負荷と、日常に負う無意識の受容期待値。でも、そんなこと正面から引き受けて、「召された」恵みだけを数えて心身の赦す限り歩んで行くべきでしょうね。いかなる分野でも、「始めの頃の人々」はそこを乗り越えて来たのですから！



## 第16回聖公会・女性フォーラムに参加して

前田 恂子(東京教区)

2年ぶりで1泊2日の聖公会・女性フォーラムが、7月20日(日)21日(月)と、京都教区センターで開催されました。テーマ「わたしたちに必要な糧を今日与えてください」(マタイ6:11)は「主の祈り」の祈りの言葉です。切実に糧が与えられることを願う祈りだと思うと、「食」について考える時とても大切な祈りです。

プログラムの表紙の言葉「食卓を囲んでみつめよう いのちを分け合おう 平和を」は、フォーラム全体の中に流れていたように感じます。

開会礼拝は「イエスとサマリアの女」ヨハネによる福音書4:7-15を聞き、円い食卓を囲み、真ん中につぼが置かれ、そのつぼの中に、生活に必要な水を注ぎ

込み「いのちの水」を与えてくださった神さまに、わたしたちをこの場へ集めてくださったことを感謝する礼拝で始まりました。

何年か前のフォーラムにも美味しい食事を作ってくくださった高橋さん(高槻聖マリア教会信徒)のケイタリングで食事、ここから学びは始まりました。食材の産地、料理によっては、輸入品を何品か使っていること。メインのローストビーフは、今回北海道教区 旭川聖マルコ教会から参加された荒川恵美子さんの牧場で飼育された短角牛肉(赤身が多く脂肪が少なくジュシー!)を取り寄せ作られたものでした。美味しいごちそうを頂いた後は、「食」の現場から、荒川さんの牧畜の現状、苦労は多いが、安全・安心にこだわり消費者に届けたいという気持ち伝わりました。高橋さんの、ケイタリングを始めるまでのお話、「食」を大切に料理に関するお話、美味しいローストビーフの簡単レシピもありました。

発題では、世界の食糧や水が、どんな現状の中で確保されているのか、とくに子どもたちがどんな状況の中で生きているかなどが、紙で作られた人形をボードに貼り説明されました。また、紐を使い大陸の面積を表し、人口を私たち、人口に対する食糧の配分をパンとしてそれぞれの大陸に立っている人に配ってみると、私たち日本の含まれるアジアや北アメリカ・ヨーロッパがパンを多くもらえる。世界の人口のほんのわずかな富裕層の

人々が世界の大半の食糧を消費している。これは「私たちに必要な糧を今日与えてください」と、いのちを保つための糧を必要としている貧しい国の人々の分を奪い取っているのでしょうか。心が痛みます。私たちの国で自給率を上げましょう。豊かな国とは、必要な作物を自給できることなのでは。豊かさの象徴のように、フードマイレージやバーチャルウォーターも考えずに消費する生活を考え直すこと。地球温暖化で起きる災害もみんな繋がっている問題でしょう。

2日目は、「食と環境」・「食と子ども」・「食と平和」・「食と健康」の分科会で、環境のことで、資源を守るためのリサイクル、量産するための肥料の使い方、有機農法のこと、感謝して食事をする事、「食育」について、日本だけでは自給できない食材が何処から輸入されるのか、などが分かち合われました。

閉会礼拝の聖餐式は、テーマであるいのちの糧を、食卓を囲み、ともにいただく感謝の礼拝でした。

「神さま、あなたの不思議な力が  
わたしたちに先立って道を示して  
くださいますように  
あなたの光がわたしたちの上に輝き  
世界を照らしてくださいますように  
わたしたちと共に歩む仲間を与えて  
ください  
すべての人に喜びを満ちあふれさせ  
てください」(「こころを 神に」  
わたしたちのいのり集より)

## 第16回聖公会女性フォーラムの報告

飯田典子(神戸教区)

「わたしたちに 必要な糧を 今日  
与えてください」マタイ6:11

7月20日・21日の二日間、猛暑の京都で北海道から沖縄まで36名の方々の参加を得て、聖公会女性フォーラムを開催することができました。今回は関西のメンバーが担当しましたが、この女性フォーラムは「女性が教会を考える会」の有志の方々によって始められ、今年で16回目を迎えました。これまで女性司祭や教会女性をめぐるさまざまな課題や問題が話し合われてきました。昨年は沖縄で開かれ、まさに沖縄ならではの問題に直面している女性たちの声を聞くことができ、多くのことを共に考える時が持てました。

今年は「食卓を囲んで みつめよういのちを 分け合おう 平和を」と題して「食」をテーマに取り上げました。折しも洞爺湖サミットが開かれ、温暖化ガスの削減やアフリカの飢餓や貧困問題が話し合われていましたので、このフォーラムの参加者も「食」をめぐるテーマには、より一層関心が高まっていたのではないのでしょうか。

日本の食糧自給率が40%を切った今、諸外国からの輸入に頼らざるを得ない現状は、さまざまな問題を提起しています。大量の食料輸入には、輸送に伴い排

出されるCO<sub>2</sub>から地球温暖化の問題、そして世界的に水不足が懸念される中、バーチャルウォーター(仮想水)と呼ばれる農産物の生産に使われた水も一緒に輸入していると考えた水の問題、また食の安全性の問題などがあります。今回の分科会でも「食と環境」「食と平和」「食と子ども」「食と健康」の4つに別れて話し合いが行われ、地球の環境や日ごろの食べ物や健康について改めて考えるきっかけになったのではないかと思います。

現場からの報告として、食事作り(夕食、昼食)を担当して下さった大阪教区の高橋敏子さんと短角牛の生産者の北海道教区の荒川恵美子さんの話を聞きました。荒川さんが育てられた短角牛が高橋さんの調理でローストビーフとして食卓に並び、まさに「いのちをいただいている」そして「食べたものがいのちになる」という思いを皆さんが持たれたのではないかと思います。

「食と聖書」と題したコントの中で、「人はパンのみで生きるものではない」という聖書の言葉から「信仰が問われるのは、このパンをどう食べるか、そしてどう分かち合うか」ということであり、神さまが創られた世界を人間が好き勝手にした結果、環境が破壊され、食べられる人と食べられない人が分断されてい

る現状は、神さまのみ旨に適っているとは思えない。教会もそういうことを真剣に考え始めなければいけない」とありました。環境破壊も飢餓の問題も人間の身勝手さや果てしない欲望を改めない限り事態はどんどん深刻さを増し、世界中に苦しんでいる人たちが増え続けることとなります。今回のフォーラムを通して「食」の問題を考える時、グローバル化

の中で何に目を向け、何に思いを馳せるかが示されたと思います。これからも教会女性たちが知恵を出し合って共に考えながら、行動していければと思いました。

最後に上田亜樹子司祭の司式、三木メイ執事の補式によって聖餐式を行い、解散しました。

### 「出会うことから新たな一歩へ Being Together Makes a Difference」

～女性を中心とする協議会～ (東京教区・エルサレム教区主催)に参加して

(東京教区 東京・エルサレム教区協働委員会 松浦順子)

東京教区内でこの協議会開催が具体的課題となり、私も担当者の一人に加えられたのは2年あまり前のことです。これは、両教区が何度かの相互訪問を経験したとき、両教区の人たちがしばらく同じ場所にとどまって、ともに同じ時間を過ごすことが、互いをより深く理解する上で必要であろうとの発想から生まれた企画でした。それまでは言語の障害とともに、特に女性はとかく男性に発言を譲る傾向が顕著でしたから、なかなか生の声を聞くことができませんでした。けれども、なぜわざわざエルサレム教区で会議なのか？なぜ女性の会議なのか？話し合ってそれから何をするつもりなのか？会議にかかる費用で直接困窮している女性や子どもを援助する方が有効ではないか？などなどの疑問の声も少なからずありました。スタッフとされた者たちにとっても、自分たちが出掛けて行ってどんな意味があるのだろうか？と問う作業がしばらく続き、なかなか実行計画を立てるところまで進めませんでした。合宿をして、その問いを黙想のうちに深め合うなかで、ついに「やってみよう」という決意を促したのは「もし、私たちが行くことによって、エルサレム教区の女性たちが一堂に会することを可能にするなら、そのことに意味があるかもしれない」という思いでした。準備のプロセスでも度々障壁や困難にぶつかりましたが、スタッフは心を一つに励みついに8月15日に17名がアンマンへと飛び立ちました。

エルサレム側からは、ガザを除く教区内各地から、ある人たちは危険を冒して国境や検問所を通過して集まり、4泊5日を共に過ごしました。日本語 英語の通訳の他、英語

アラビア語の通訳は参加者の一人が見事にこなしてくださり、心配された意思疎通の問題はほとんどありませんでした。

そして最終日にまとめたのが別掲の共同声明です。そこにすべての参加者の思いが凝縮されています。私たちが問われ、自らも問い続けてきた「行くことの意味」は 評価5. にさらりと書かれています。これこそがその答えだったと思います。そしてそこから何か新しいことが始まる予感があります。

この記事を読んでくださっている日本聖公会全体の女性たちと、「聖地」の今を生きている女性たちとの交わりと連帯が可能になるよう、一足先を歩きだした者たちの責任は重いと実感しています。11 月末に詳細な報告書が出来上がります。東京教区事務所にお問い合わせくださるようお願いいたします。

## 共同声明

エルサレム教区・東京教区 女性を中心とする協議会

### 「出会うことから新たな一歩へ」

2008年8月20日アンマンにて

「エルサレム・東京教区 女性を中心とする協議会 ~出会うことから新たな一歩へ~」は、ヨルダン王国の首都アンマンにあるテオドール・シュネラー・ゲストハウスにおいて、8月16日から20日まで、両教区の女性を中心として行われ、実り多いものとなりました。

東京教区(教区内外を含む)から17名と、エルサレム教区から25名、計42名が参加し、それぞれの国境や検問所を越えて一堂に会することができました。

「Being Together Makes a Difference ~出会うことから新たな一歩へ~」というテーマのもとに、両教区の女性たちが同じ場所にとどまり、協力しあって協議会を運営することによって、すべての参加者は共に在ることの真の意味を見出し、それを価値あるものだと認めることができ、協議会が豊かなものになりました。

また、両教区の女性たちの距離が一段と近づいたことを実感することもできました。

そこで、私たち両教区の参加者は、以下の「評価」と「未来に向けての展望」を全員で確認したことをご報告いたします。

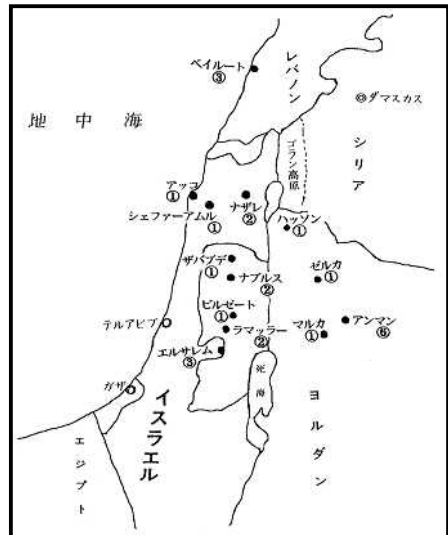


### <評価>

1. 参加者の多様な霊性が豊かにされました。それぞれの霊性にふれる体験は、神の存在をより近く感じさせるもので、それは私たちすべてを力づけました。
2. 私たちが多様でありつつ一つであることを実感し、これを感謝しました。
3. 私たちは互いの文化を分かち合う喜びを体験しました。これはそれぞれの独自性を知り、他者の持つ豊かさに気づくことでした。
4. 私たちはこれからも、互いの存在を心と思いと祈りのうちに覚えることを確認しました。
5. 最後に、この協議会が両教区の女性が一堂に会するという大切な場であったと同時に、5つの国に分かれたエルサレム教区の女性たちが、危険を冒して会うことができた極めてまれな機会であったことを強調したいと思います。エルサレム教区の女性たちのなかには、今回初めて会うことができた人々もあります。このような協議会開催が多くの困難を伴うものであるにもかかわらず、可能であることを改めて認識しました。

### <未来についての展望>

1. **分かち合い**  
両教区の女性たちが、お互いの名前を呼び合える交わりをこれからも続けること
2. **力づけ励ますこと**  
女性がリーダーシップを発揮できるよう励まし合うこと
3. **関係づくり**  
両教区の女性たちを結ぶ「架け橋」となるような小委員会を設置すること



協議会参加者の居住地域(丸数字は人数)

「エルサレム教区・東京教区 女性を中心とする協議会」

参加者一同

## コンゴ民主共和国 (DRC) からのアピール

コンゴ民主共和国、IAWN 代表のムギサ・イシシゴマさんから、9月8日、IAWN のネットワークを通じてアピールが届いた。コンゴ民主共和国はベルギーの植民地からの独立(1960年)以来、その豊かな鉱物資源をめぐる利権戦争に政変、民族間対立も加わり、平和が続く歴史はほとんど無い。特に、1998年から2002年までは、周辺諸国も巻き込み、複数の反政府勢力と政府軍の間に紛争が続き、死者250万、難民200万ともいわれる大惨事となった。2006年、一応の和平合意を見たものの、今も虐殺、略奪、レイプの報告は後を絶たない。宗教の8割がキリスト教であるこの国で、教会の果たす役割は大きい。以下は、アピールの要約。

長く続いた戦争で多大な人命が失われ、社会のインフラは壊滅状態で、国民の多くは極度の貧困に苦しんでいます。反乱軍と政府軍双方からすべてを奪われ、特に少女を含む女性は、性的暴力の犠牲者です。その結果、HIV/AIDSに感染したり、望まない妊娠に苦しめられたりし、しかも医療の恩恵に与ることも簡単ではありません。戦争はいつもそれを起こす人と、それに苦しめられる人が違います。一方、植民地時代に、コンゴの人々は大変な重労働を強いられていましたが、自分たち自身のために生産する方法を学ぶ機会が与えられず、当時の制度が人々の依存性を育ててきた事実もあります。この事柄に重点を置いて、何かなされなければなりません。魚を与えるより、漁の仕方を教えるべきです。

教会には、人々を平和と和解のために、訓練する責任があります。まず、彼ら自身に自分たちが価値あるものであること、少しずつ発展するのに必要な手段も、知性も、力もすでに持っていることを気づ

かせる必要があります。彼らの持っている賜物を、自分たちの必要とどうやって繋げるか、解決を見つける手助けをしたいと思っています。

男女平等は必ずしも確立していませんが、女性は、子どもたちに食べさせ、学校に通わせます。神の創造の法則にあって、男性のパートナーとして国民と国家に調和ある再建をするために女性の力は必要不可欠です。

ここ、イツリ州ボガ教区には、女性のための二つの組織、聖公会の女性たちを繋ぐ「マザースユニオン」と、すべての女性に開かれた超教派的組織である「平和と社会的向上のための女性連合(WUPSA)」があります。この二つが手を取り合って、1) 難民キャンプから帰国し、すべてを失った人々の生活の再建 2) 民兵に加わって、まだ武器を持っている若者の武装解除 3) 夫を亡くした多くの女性たち 4) いまだに恥と感じているレイプ被害者、これらの課題や人々にかかわる教育や、経験の分かち合い、訓練セミ

ナー等を行うことを目指しています。  
厳しい状況ですが、イエスが貧しいもののために来られ、神が彼らを愛し、知っておられるという信仰にたって、私たちは楽観的です。私たちの働きをあなた

がたと分かち合う機会を与えられたことに感謝します。私たちのために祈ってください。

(文責・夏目和世)

アピール全文は、日本聖公会のホームページ”教会への連絡”から入っていただき、  
カテゴリー 女性に関する課題の担当者 のページに掲載していますので、  
どうぞご覧ください。 <http://nskkiinkai.blog116.fc2.com/blog-category-5.html>

### ジェンダープロジェクトより

日本聖公会第 57(定期)総会をはさんで、しばらく活動が停滞していたジェンダープロジェクトですが、今総会期の「正義と平和委員会」も 10 月より発足し、引き続き正義と平和委員会の中でのプロジェクトとして活動することが確認されました。

前総会期からの継続課題であるセクシュアル・ハラスメントについてのアンケート実施は、管区人権担当者の賛同も得て、専門家の意見もいただきながら女性デスクと共に準備中です。また、NCCの世界祈禱日献金から助成をいただいた「ハラスメント防止のための教材づくり」の作業にも、女性デスクを中心としたチームにジェンダープロジェクトとして参加・協力を行っています。12月に行われる女性の司祭按手 10 年感謝プログラム(感謝礼拝と交流会)では「女性の司祭職の正当性を保持する」ということを今一度確認し、さまざまな課題をより多くの人と共有する機会となることを願っています。今総会期の正義と平和委員会では、ジェンダー、日韓、憲法、沖縄関連、の 4 つのプロジェクトが継続されますが、個々の課題を担いつつお互いに関連付けられることをも見出しながら、共に主にある正義と平和の実現のために力を尽くしたいと思います。

### 女性デスクより

『各教区でハラスメント防止を進めるための分かち合いと研修の会』  
を開きました(於 京都教区センター)



去る 8 月 28~30 日、管区女性デスク主催で標記の会を開催しました。  
今、各教区ではハラスメント防止のための取り組みを始めようとしているところです。  
ぜひ「うちの教区はどんなことしているんだろう?」と関心を持って注目していただけたら、と思います。今回の会の概要をご紹介します。

参加者：9教区（2教区は欠席）から派遣されたハラスメント防止のしくみづくりに関わる方々23名

目的：・すでにセクシュアル・ハラスメント防止委員会を設置している京都教区の取り組みの経験に学び、相談員養成プログラムに体験参加すること。  
 ・互いの教区の進捗状況やその中で困難な点を分かち合い、協働できる部分の可能性について考えること

## プログラム

1日目	2日目	3日目
	朝の祈り ・ハラスメントの課題を意識化するためのワークショップ・教材づくりについての紹介 ジェンダープロジェクト 松原恵美子さん ・各教区の進捗状況報告 ・海外、他教派の取り組み協議	朝の祈り ・相談の実際 ・ロールプレイ
開会の祈り ・京都の事件の経過について （高地敬主教） ・京都教区セクシュアル・ハラスメント防止委員会の取り組み （京都教区セクシュアル・ハラスメント防止委員会 三木メイさん 佐々木靖子さん）	（ 京都教区防止委員会主催相談員研修に参加） 公開講演「セクシュアル・ハラスメント防止とは～被害者救済の立場から」（講師 井上摩耶子さん・カウンセラー） ・京都教区防止委員会ガイドライン 相談員としての基本的態度、相談の実際など（辻法子さん）	公開講演 「セクシュアル・ハラスメント～最近の事例から」 （講師 養父知美さん・弁護士） 閉会の祈り

各教区からの報告では以下のような状況がわかりました。

- ・ 現在、京都以外でガイドラインを策定しているところは一教区だけで、他は準備会として委員会の設置を準備中あるいは検討中、または学習会の開催にとどまっている教

区がほとんど。

- ・ 教区という組織の中に「訴え」を取り上げる道筋をつける必要性があることについて認識はされてはいるものの実際には「教役者の多忙」「人材不足」「ハラスメントを教会で取り上げることの難しさ」などの理由でなかなか取り組みが進んでいない。

#### **質疑応答や協議の中のご意見から**

- ・ 付属施設を持っている教会も多く、司祭が園長になっているところも多い。防止については併せて考えていく必要がある。
- ・ 限られた経済的、人的資源、また狭い教区の間関係の中で相談窓口を訴えを上げることの難しさを感じる。教区を越えての窓口設置の可能性も考える必要があるのではないか。
- ・ 京都の事件の経過では、まず信徒こそをなぜ守ってくれなかったのか、という思いが残る。
- ・ 教会は教役者だけですべてをやっていけるわけではない。信徒も主体性を持ち、互いにケアし合う関係を築いていくべきではないだろうか。
- ・ 教区、管区（主教会のリーダーシップも含めて）それぞれの主体性で行えることの整理が必要ではないか。
- ・ 今回の京都の事件のように被害がすでにはっきりしている場合のフローチャートも必要では。
- ・ 教会こそ、自分の教団の中だけでなく、外に向けてもハラスメント防止の取り組みに進んで関わって行くべきではないか。

#### **会を終えて**

京都教区の2つの公開講演会では講師より、時として一次被害よりも大きく被害者を傷つける「二次被害」や、教会の中の「聖職者、信徒に限って…」という幻想、力を持つ立場にある人の「無自覚さ」などについても指摘されました。このことは、今、生きている人間の状況とかけ離れがちな教会のありようや、教会の中の力関係、中でもジェンダーによる役割分業によって、女性の働きが限定され、意思決定の場に関わっていないことが、教会におけるハラスメントに大きく関係しているだろうと考えられます。被害にあい、声にできない思いをかかえている人とともに、一人ひとりがかけがえのない存在として尊重されるとはどういうことなのかを、今後もみんなで考えていきたいと思います。今回、京都教区からの呼びかけに応じてこの研修会を開き、その取り組みを広く分かち合えたことを感謝します。今後ともご協力をお願いします。

（報告 女性デスク 山野繁子 木川田道子）

シリーズ「聖書の中の女性たち」

## 口寄せの女

サムエル記上 28 章

\*\*\*\*\* 木川田道子 (京都教区)

### “口寄せの女、サウル王にごはんを食べさせる”

去年の夏、ジェンダープロジェクトとの合宿で、聖書の中の女性たちの物語を発掘しよう、と改めて創世記から女性の出てくる話を読み進めるうち、私が何となく気に入った話のひとつがこの物語だった。(聖書の標題は「サウル、口寄せの女を訪れる」)「口寄せ」とは、いわゆる霊媒師で、日本で言うあの恐山の「イタコ」とか、沖縄の「ユタ」や「ノロ」という感じだろうか。死者を呼び出し、生者にことばを伝えてくれる人のようだ。サウル王とは、前回のシリーズに登場したミカルの父王である。それまで王のいなかったイスラエルの民が、他国と同じく、自分たちも強い王が欲しい、と神に望んだことから、神は、預言者サムエルを通して「王を持つということは、王以外は奴隷になるということだがそれでもいいか」と人々に念を押した上でサウルを見出し、民の王とした。偉大な先見者でもあるサムエルは、神でなく人を支配者、権力者と選ぶことは誤りで悪だとしながらも、しかし人間がそう選択してしまった以上は、今後はその中で「それ

ることなく」主に仕えるようにという神のことばを伝える。

神を退け、人の王として立てられたサウルは、プレッシャーの中、それなりにがんばったが、しかし王とは大変な仕事だ。民や財産を守るために、戦い続けなければならないし、判断がまずいと民は自分を見離さないだろうかと心配にもなる。人が、胆力、知力、気性ともに優れた家来ダビデをほめると、殺したくなるくらい妬ましくなる。結局サウル王は、あることで神の怒りを招いてしまい、神のことばが託宣されなくなる。敵であるペリシテ人との戦いを目前にしても、神は沈黙のまま。とうとう王は、自分が異端として追放した口寄せの女を頼ってまでも神のことばを聞こうとするまで追いつめられる。彼女は、一旦は禁制の口寄せを行うことはできないと断るが、結局は、必死の王のために、死者サムエルを呼び出してやる。しかし、あの世からやってきたサムエルの王への返事は冷たく、神の心はすでにお前から離れ、戦でもイスラエル軍は負ける、と予言して帰って行

く。神の期待に応えられなかった自分に絶望した王は気力が尽きてその場に倒れてしまう。口寄せの女はそんな王に、「はしためはあなたの声に聞き従いました。命をかけて、あなたが言った言葉に聞き従ったのです。今度は、あなたがはしための声に聞き従ってください。ささやかな食事をあなたに差し上げますから、それを召し上がり、力をつけてお帰りください」と力づけようとするのである。

死んだ人と呼び出してやる仕事はきつい。けれど、自分を頼りにせめてもう一度死んだ我が子、伴侶の声を聞きたい、と必死の思いでやってくる人々がすっかりした顔でお礼を言い元気になって帰って行く姿に励まされて自分は大事にその仕事を続けてきた。そんな自分たちを、サウル王は魔女扱いし、異端のレッテルを貼り仕事の誇りを奪った。しかし、今、目の前にいるこの王も実は弱い人間のひとりだった。自分に悩み、人を信じられず、矛盾したことをしてはまた落ち込む。「王」でなく、なぜ自分を普通の民として生きさせてくれなかったのか、そんな王に、口寄せの女は、思わず自分ができる精一杯のことを申し出る。王にとっては不気味に思っていた口寄せが、自分のために、仔牛を屠り、小麦粉を練ってパンを焼き、とにかく食べて今を生きる、と言う。口寄せの女の自分に向けられたまっすぐな気持ちが、王には伝わったのだろう。王は、文字通りの命のパンを食べ、再び自分の軍隊に戻り、神の助けの

ないままに、勝つ見込みのない最後の戦に向かい、敵に囲まれる中、自ら剣の上に伏し、死ぬ。(ここからは私の想像) 口寄せの女は、風の便りに王の最後を聞き、思う。「かわいそうな王様。あなたは最後まで王として戦い、そして死んでいったのですね。あなたの態度は立派だったと思うけれど、わたしはいつも思うのです。人はなぜ戦に明け暮れ、奪ったり、奪い返したりを繰り返すのか。人がもっと幸せに生きる道は他にあると、死者たちは、わたしのからだを通して、いつも今生きている者たちに伝えようとしにくるのに。」

ところで、昔、沖縄の博物館に行った時の「ノロ・ユタ」の説明に「大病をしたもの、大きな不幸を経験したものなどがノロやユタに選ばれる」とあったことが印象に残っている。他者の耐え難い悲しみや苦しみに同調できる人でなければ、言葉をあの世からこの世へと運んでくるなど到底できないことなのかも知れない。この口寄せの女にももしかしたら何か悲しい体験があったのかも知れない。その人にとっての大きな悲しみを生きてきたからこそ、すぎる思いで自分を頼ってきた人の思いにも寄り添えるのかも知れない。

私は、きっと、相手の苦しみから目を離すことができず、思わず行動した口寄せの女の率直さと温かさが好きなんだと思う。

BOOK REVIEW10 評者 吉谷かおる

山口里子『虹は私たちの間に 性と生の正義に向けて』

新教出版社、2008年、3600円+税

海野弘『ホモセクシャルの世界史』

文春文庫、2008年、952円+税



夜が長くなり、本格的な読書シーズンを迎えました。みなさんばりばり快調に読み進めておられることと存じます。今年のベスト1小説を発表するにはいささか早いのですが、コーマック・マッカーシー『ザ・ロード』(早川書房、2008年、1800円+税)が年末までそのまま駆け抜けるのではないかと予想します。何らかのカタストロフの後、人類が生き延びられる環境ではなくなった地上を、カートを押しながら南へ歩く父と幼い息子の、神話的といっているような物語です。映画化も決まっているそうです。ちなみに今年の映画部門は、オ人ション・ペン監督『イントゥ・ザ・ワイルド』(2007年)で決まりか。これは、大学を卒業するや真の「自由」を求めて放浪の旅に出て、アラスカの厳しい自然の中で果てた青年の、その旅の終わりまでの軌跡をたどる実話に基づく作品(原作はジョン・クラカワー『荒野へ』集英社文庫)。どちらも陰々滅々たるストーリーながら、その文学性の高さにしびれますよ。

さて話は夏の暑い頃に遡りますが、10年に一度のランベス会議が開催されました。アングリカン・コミュニオンでは、女性と同性愛者の聖職についての意見の

対立から分裂の拡大が懸念されているといわれます。私は同性愛者に対して強い反発の姿勢を示している地域について、その理由が知りたいと思い関心を抱いていました。おそらくその国や地域の歴史、文化や政治との入り組んだかかわりがあるのですが、他宗教との関係を配慮してという理由以外には、まだ十分な情報が得られていません。このさい日頃の不勉強を反省し、同性愛についての本をかため読みすることにしました。

非キリスト教社会の日本でも、キリスト教は同性愛を禁じている、「なぜなら聖書によれば同性愛は罪であるから」と受けとめられていることが多いのではないかと思います。実際には現代の教会は同性愛者に対して「寛大な(!)」方向に動いているといえますが、「どのレベルまで受け入れられるか」という議論はされても、「聖書によれば同性愛は罪」という前提が問題にされることはこれまでなかった。そこで、山口里子さんは近著『虹は私たちの間に 性と生の正義に向けて』で、本当に聖書には同性愛は罪だと書いてあるのか、テキストの吟味にまっこうから挑みました。同性愛を断罪するテキストとしてすぐ思い浮かぶのは、創世記



のソドム滅亡の記事でしょう。男色をソドミーというくらいだからソドムを滅ぼした「悪徳」は男性同性愛である、と多くの人が思い込んでいます。しかし本書では、原語にもどり、テキストを丹念に分析することにより、ソドムの罪は、自分と異なる人の生存権を踏みじめるゼノフォビア(外国人/よそ者への恐怖)の暴力、ホスピタリティの欠如であることが明らかにされます。このように聖書を楯に「同性愛は罪」という主張はできないことを次々に検証してみせてくれるので、誰かのセクシュアリティを非難したり排除したりするような記述に納得のいかない思いをしてきたかたは、爽快な気持ちになれます。本書で取り上げられるセクシュアリティにかかわるテキストには、人間の創造やパウロ書簡の一部のように結果的に性差別につながった(と私には思える)ものも、ダビデとヨナタン、ルツとナオミの物語のように同性間の愛を扱うものもあります。そしてこれらのテキストがAテキストを巡る状況、Bテキストの吟味、C 思い巡らし、というプロセスを通じて丁寧に分析されており、疑問を氷解させてくれたり、思いがけない奥行きに気づかせてくれたりします。とても分かりやすい文章ですし、用語についても親切な解説がほどこされていますので、専門的なのかなと敬遠せずぜひ手にとってお読みください。

それにしても、古代ギリシアの昔から、男色(ソドミー!) というものが広く行

なわれていたことは誰でも知っている一方で、同性愛は罪だ病気だ異常だと言ってはばからない人もいるのはどういうわけなのでしょう。同性愛者の大列伝ともいべき本、海野弘『ホモセクシャルの世界史』が文庫化されましたのでご紹介します。面白いです。アレクサンドロス大王、カエサル、ハドリアヌス帝、アウグスティヌス、レオナルド、ランボー、バイロン、そしてオスカー・ワイルドなどが次々に俎上に上げられ、20世紀には英米文学とバレエとハリウッド映画の大立者が続々登場します。この人たちが登場しない世界史などは考えられないし、それでは文学や芸術もスカスカになってしまいます。本書によれば、近代になって男女の生物学的違いが解明され、一元的に男中心に考えられていた人間が男と女という二つの性に区別されるようになった結果、同性、異性、という概念が重要な意味をもつようになり「同性愛」(ホモセクシャル)が生まれた。そして「罪」から「病気」へと見方が変わった19世紀末をへて、「性の世紀」20世紀の社会、ことに文化、芸術を特徴づけるにいたったということです。「女性」が独立した性として分離されたことで、タイプとしての同性愛者が出現したわけで、それまでは愛しているのは男性で女性との性交は子どもをのこすため、という男性のありかたは、性愛の快楽自体が罪とされていた時代には隠されていたものの、珍しくもなければ非難されるものでもなかった

ようです。

ただし！男性間の性交では場合によってはどちらかまたは両方が「女の役割」をすることがあると思うのですが、どうも、古来より忌避されたり軽蔑されたりしていたのは男(上位・支配・能動…)が「女の役割」(下位・従属・受動…)をすることであったようだ、とわかり、上記の二冊を読んで遅まきながら蒙が啓かれる思いでした。「男らしい」ことが大事だったのでですね。ジェンダープロジェクトにとって、いわゆる性的少数者のかたたちとの連帯は課題として意識しながらも、踏み込めずにいる領域でした。人

間を男性と女性の二つに分けるやりかたは今日では通用しないとわかっていても、ジェンダーの正義を求める、という場合にどうしてもまず「性別」に基づく差別を解消しようとして男女を二分してしまうためです。聖書を通じて神さまが祝福してくださる性の豊かさ、多様性を回復するためにも、まだまだこれからの働きに期待してほしいところですが、このジェンダープロジェクトのニュースレター『タリタ・クム』も10号となったところで、現メンバーの任期が満了となりました。またお目にかかれることになったら、本の話をつつまでもしていきたいです。

## 女性の司祭按手 10年感謝プログラムのお知らせ

わたしたちの教会が

さらに豊かなパートナーシップへの道のりを

共に歩んでいくために

感謝礼拝と交流会

とき 2008年12月2日(火) 午前11時 感謝礼拝 礼拝後 交流会

参加費 1,000円(昼食、記念誌代として)

ところ 日本聖公会中部教区名古屋聖マタイ教会 名古屋市昭和区名月町2-53-1

\*どなたでもご参加いただけます。皆様お誘いあわせてぜひいらしてください！

お問い合わせは 事務局 木川田(きかわだ)まで

---

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3~4回発行予定)女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。

---

ジェンダープロジェクトの活動に関するお問い合わせ、また紙面についてのご意見は、下記にお願いいたします。

岡左代子 073-422-0055 Fax 073-436-3333